



## 「グローバルリーダー」を目指して

～ハーバード大学スケベンス眼研究所 & ボストン大学エグゼクティブ MBA 留学記～

猪俣武範

(平成 20 年入局)

Schepens Eye Research Institute, Massachusetts Eye & Ear Infirmary, Harvard Medical School,  
Department of Ophthalmology,  
Boston University School of Management, Executive MBA program class of 2015

### はじめに

平成 24 年 9 月より、留学の機会を頂きハーバード大学スケベンス眼研究所にて角膜移植免疫、ドライアイなどオキュラーサーフェスの炎症に関する免疫の研究を開始しております猪俣武範と申します。このような貴重な機会を頂き、順天堂大学眼科学教室の皆様、同窓会の皆様深く御礼を申し上げます。

留学してからもうすぐ 1 年半が経過しようとしていますが、私がボストンに来てから例年以上に寒い冬が続き、春がとても待ち遠しくあります。昨年に引き続き、同窓会誌に近況の報告がで



写真 1・海外留学へのあこがれの発端はタイで行われたコラートコース



写真 2・世界最大の眼科の基礎研究施設であるハーバード大学スケベンス眼研究所

きますことを光栄に思います。  
思えば、私が海外留学に強く興味を持ち始めたのは、大学院生として平成 20 年から松田彰准教授に毎年連れて行っていただきました ARVO と、平成 21 年に小野浩一准教授に参加させていただきました WHO の Sight First Regional Course on Prevention of Blindness (Korat Course) (写真 1) です。

Sight First Regional Course はタイのコラートで開催され、アジア 12 カ国、27 名の参加で開催されました。私も日本人の代表として参加させていただいたのですが、自分の考えていたことも発言できず、とても悔しい思いをしました。ここでは小野浩一准教授や平塚義宗客員准教授は英語で講義やディスカッションをされており、国際的なコミュニケーション能力の重要性を痛感いたしました。また、米国最大の眼科の基礎医学学会である ARVO では世界最先端の基礎研究にふれるとともに、日本の眼科医が世界を相手に発表している様子を見て、私も世界を相手に戦う「グローバルリーダー」を目指したいと思うようになりました。

私の中のグローバルリーダーは「世界に通用するプロフェッショナル能力をもち、国内外問わず、



写真 3・非常に国際的な Dana ラボメンバー  
中央が Reza Dana 先生、その向かって左の女性が私の supervisor の Jing Hua 先生



リーダーシップを発揮できる人材」と定義しています。

私は留学のフェローシップを頂いた2012年1月からこのグローバルリーダーを目指すことを留学の目標に設定致しました。具体的には①留学先のハーバード大学スケベンス眼研究所で行われている Cutting Edge な研究を身につけ、順天堂大学に還元する。②米国で MBA(経営学修士)を取得し、経営学とグローバルリーダー論を身につけ、眼科学教室ならびに順天堂大学の発展に貢献する。③海外留学で得た経験を学生や後輩にシェアし、日本の医療教育に貢献することを目標に設定致しました。

#### ハーバード大学スケベンス眼研究所

ハーバード大学スケベンス眼研究所は1950年に設立された世界最大の眼科専門の研究施設

として知られています(写真2)。昨年に Massachusetts Eye & Ear Infirmary と合併し、臨床と基礎研究の効率化が行われました。私の所属する Reza-Dana 教授のラボは、アメリカ、日本、中国、ブラジル、インド、メキシコ、イタリア、ドイツ、イラン、スロバキアから集まった21名の国際的なメンバーで構成されています(写真3)。Dana 研究室は眼免疫を主に研究対象としています。私のプロジェクトはハイリスク角膜移植における制御性 T 細胞の分布と働きの解明です。制御性 T 細胞は頭部リンパ節細胞のうち5%程度存在し、T 細胞の働きを抑制し、角膜移植免疫で重要な働きをします。C57BL/6 マウスから BALB/c マウスに全層角膜移植を行い、頭部リンパ節細胞を



写真5・2014年角膜カンファレンスでの発表の様子

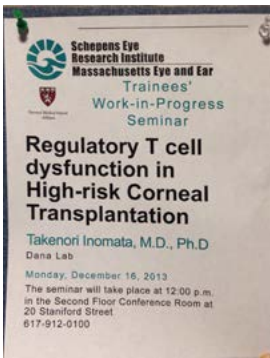
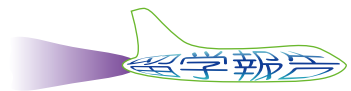


写真4・スケベンス内のセミナーにて60分間の英語での講演は大変でした

用い制御性 T 細胞の角膜移植における免疫寛容に対する働きを研究しています。

スケベンス眼研究所ではボストク(博士研究員)の教育制度が非常に整っていることが特徴です。ボストクには毎日の様に行われるレクチャーへの参加やメンターの先生とのインタビューなどが科せられます。その中でもボストクにとって一番の大きなイベントは1時間のリサーチセミナーを担当することです。このセミナーは1年くらい経過した頃に順番が回ってき



ます。もちろん1年間で研究の成果は全て揃う事は難しいのですが、現在の成果を発表し、他のラボの研究者とディスカッションする事が目的です。私も2013年の12月にこのセミナーの担当が回ってきました(写真4)。半年くらい前に期日が決まりましたので、十分な準備をもって挑みましたが、かなり緊張したことを覚えております。

スケベンス眼研究所では、私の直接の指導教官である Jing Hua 先生にたくさんのプロジェクトを頂き、現在までに7つほどの研究に関わらせていただいております。アパートは研究室から徒歩5分以内の所に借用しているということもあり、ほぼ泊まり込みの生活で研究をさせていただいております。このようなとても素晴らしい環境で研究させていただき、とても充実しております。研究成果としては、2013年にハーバード大学で行われた Biennial Cornea Conference や2014年の角膜カンファレンスでは講演(写真5)のご機会も頂き、徐々に成果が出てきたと思います。



写真6・ボストン大学経営学専攻校舎  
アメリカのビジネススクールの建物は卒業生の寄付によって建造され、非常に豪華なことが特徴です。

#### ボストン大学エグゼクティブ MBA

私の米国留学におけるもう1つの挑戦は、米国の大学における経営学修士(MBA)の取得です。MBAでは経営学や統計学のみならず、オペレーションやマーケティング、リーダーシップ、意思決定などグローバルリーダーを目指すにあたって必要なスキルを学ぶことができます。私は研究と両立できる方法として、働きながら受講でき、なおかつ物理的距離の近いボストン大学エグゼクティブ MBA コースを選択しました(写真6)。ボストン大学のエグゼクティブ MBA コースはボストン地区で最も歴史のあるエグゼクティブ MBA プログラムで、ニューイングランド地方では1位、世界では27位にランキングされています。



写真7・MBAのクラス構成  
日本人の代表として意見を求められます

エグゼクティブ MBA は日本ではまだまだあまりなじみがありませんが、欧米では人気が集まっています。エグゼクティブ MBA コースは通常の MBA と異なり、8.9年以上の勤務経験ならびに、3.5年以上のマネジメント経験が必要とされます。クラスの年齢も平均年齢は40歳と管理者向けのコースになっています。私の

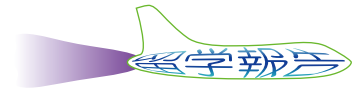


勤務経験だとこの基準には満たしていませんでしたが、そこはアメリカでした。何度もアドミッションオフィスに足を運び、私がMBAを受講できるのはアメリカにいる「イマ」しかないこと。私の将来目指すグローバルリーダーにはMBAのスキルが必要なることを粘り強く説明すると、入学試験に応募する許可を得ることができました。私の受験したボストン大学は医学部もあり、比較的医師のキャリアにも寛容であったことが要因の1つと考えられましたが、強いモチベーションがあればどうにかするというアメリカの寛容さをこの時に非常に感じました。その後入学試験に必要なTOEFLの試験や英語でのエッセーさらには面接の練習など、かなり苦労しましたが、なんとか、合格する事ができました。しかも、エッセーの内容が思いのほか評価され学長賞を頂くことができました。

ボストン大学のエグゼクティブMBAのクラスは30名、18カ国のメンバーから構成されます(写真7)。エグゼクティブMBAは仕事をしながら通うコースで、学習しながらすぐ学んだ事を実践できることが特徴です。授業は2週間毎の金、土に行われます。遠方から来る生徒もいるので、金曜日の夜はホテルも用意されていて、授業が終わったあとは、みんな夕食に出かけ、そのままホテルで宿題のディスカッションをするなどして交流します。クラスには私を含め医師は5名



写真8・MBAの授業風景：ディスカッション中心の授業



いて、アメリカにおける医師の経営能力に注目が集まっている様子が見えます。さらに製薬会社や医療機器メーカーも合わせたヘルスケア産業がクラスを占める割合は60%を超えていると思います。そのため、授業では病院や製薬会社を題材にしたものがたくさん扱われます。

例えば、オペレーションの授業では、サイクルタイムやボトムネックという考え方を使得って手術室の効率的な人員の配置と手術件数の設定方法や、外来における患者の待ち時間の改善の方法、さらにはシックスシグマという考え方を使得った病院の業務改善の方法などを勉強しました。もちろん医療統計も学習しますので、ダイレクトに臨床研究に活用することができると思います。

一番驚いたのが、アメリカの大学院教育のインプット量の多さです。2週間分の宿題が出るのですが、凄まじい量の課題がでます。2週間て3040時間はこの課題の予習に時間を費やしていると思います。もちろん、レポートや筆記試験もあり、非ネイティブの私はかなり苦戦を強いられておりますが、今のところ、落第することもなく、なんとかサバイバルしております。

MBAの授業のスタイルはハーバードビジネススクールから生まれたケーススタディとよばれる、実際にビジネスで起こった事例を数頁から十頁に要約したものを研究・ディスカッションする形式が取られています。事前にケースを詳細に読み込み、自分の意見を考えた上で授業に望みます(写真8)。



写真8・MBAの授業風景：ディスカッション中心の授業



他には6ヶ月毎の6人で1つのグループワークがあります。例えば、チームメンバーの職場の財務分析や業務分析を行います。グループワークでは、チームへの貢献や behavior を重視して、様々なバックグラウンドのクラスメートと力を合わせて課題に取り組みます。

MBA ではこのように、グローバルリーダーとしての実践的なスキルを学ぶだけでなく、チームマネジメントやグローバルコミュニケーション、ソーシャル behavior などを学習することができます。これらの MBA で得たスキルを順天堂の経営や教育、さらに国際化に役立てることができればと思います。

### **ボランティア、国際貢献**

MBA 受験の最も大きな収穫は、入試に準備したエッセーを通して、自分の目標やすべき事を見つめ直すことができたことです。MBA の受験のエッセーで必ずと言って質問されるのは、「Goal」や「Contribution」についてです。アメリカの受験では成績が良いのは当たり前で、その他の資質が重要視されます。それは例えば、リーダーシップ経験であったり、組織への貢献であったりボランティアであったりします。

私は自分が世界に貢献できることとして、いくつかのボランティア活動に携わっています。その1つが、日本の高校生に対して行うハーバード大学ラボ見学ツアーです。2013年から開始させていただき、今年で2回目を無事に行うことができました。ハーバード大学ラボ見学ツアーでは、ラボ内の見学ならびに、アメリカ人の研究者やレジデントによる日本とアメリカの教育の違い、私の方では、医師と研究者の仕事や留学についての講演致しました(写真9)。今年、それ以外にも JTB 様により講師として私の母校の江戸川学園取手高校の生徒に講演することができました。

その他にも、自分の留学準備が大変だった経験から2014年2月より Japan Global Medical Support(JGMS) という非営利団体を組織し、日本の医学生、若手医師の海外留学の支援を開始致しました。JGMS では2ヶ月に1回の海外留学経験者の講演会ならびに交流会と、インターネットサイトによる留学情報の提供を行っています。高校生に対する講演会では私は初心を再確認できますし、JGMS では実際に組織をマネジメントする経験を積むことができ、私の人生経験を非常に豊かにしてくれます。

### **謝辞**

最後になりましたが、いつも私を激励して下さいます村上晶教授、私の大学院のメンターであります海老原伸行教授、実験の手ほどきをして頂きました、松田彰准教授、舟木俊成准教授、そしてこのような機会を頂きました Baush&Lomb Japan 様、そして日本アイバンク協会様に深く御礼を申し上げます。

2014年4月 深夜の研究室にて

猪俣武範 拝